『原理本体論』に関する研究

金振春
韓国清心神学大学院院長

1. はじめに

万有の存在、そして価値と法則の根源者であり、第一原因者であられる天の父母様(以下「神様」)[1]は、137億年の宇宙歴史の中で、太陽系の地球においてご自身の創造理想を実現しようとした。その理想は、ご自身の性稟と存在法則を全て相続した「真の父母の理想」、すなわち、「真の父母を中心とした神様の国」だった。しかし、人類の始祖の堕落でその理想は失われ、実現されなかった。神様は、絶対・唯一・不変・永遠の真の愛のゆえに、その理想を復帰しようとする摂理をしてこられた。

人類歴史と現時代において発生する各種の問題は、第一原因者・創造主である神様がわからないところに起因する。したがって、全ての問題を根本的に解決しようとするならば、根源においてその答えを探さなければならない。統一原理は、堕落と罪の起源は堕落性本性にあり、堕落性本性の起源は「神様と同じ立場」を取ることができないことであると説明する。すなわち「神様と同じ立場」を取ることができないことが、全ての問題の発端になった。したがって、神様を正しく知り、神様と一体を成し、神様の御旨のとおりに生きることが、全ての問題の根本的な解決方案だ。

2008年8月31日、八定式記念の訓読会で、『原理本体論』を初めて語られた文鮮明先生(以下「先生」)は、ご自身の聖和(2012.9.3)に至るまで持続的に強調してきた。それだけではなく、先生は、全世界の食口たちと平和大使らに「原理本体論」教育を数えきれないほど実施した。その過程で多くの人々が『原理本体論』の定義と内容体系、そして『原理講論』との相違点に関して、疑問を提起してきた。

歴史的に万有の存在(実体、substances)と価値と法則の根源者・第一原因者である存在を「本体」(Original Substance、Origin of Substances)という名で議論した。本体論は本体に対する理論だ。したがって、『原理本体論』というのは、従来の本体論とは違い、「統一原理から見た本体論」だといえる。すなわち、新しい真理、新しい御言、あるいは成約の御言から見た新しい本体論だ。『原理本体論』というのは、他の観点からは「統一原理の本体(根源、根)に関する理論」ともいえる。なぜならば、『原理本体論』というのは、『原理原本』(統一原理の根源・起源経典)、『原理解説』(統一原理の解説経典)、『原理講論』(統一原理の講義経典)の延長線に出現したからだ。

本研究は、このような『原理本体論』に関して、多様な角度から議論する。

---

[1] 人類の救世主・メシヤ・真の父母である韓鶴子総裁は2013年1月7日、統一グループ新年始務式において、今まで呼んできた神様を「天の父母様」(Heavenly Parent)と命名した。神様は無形の真の父母で縦的真の父母で、本陽性と本陰性の中和であるとおられながら、四大愛の起源になられると言うことができる。「神様」は「一つである方」、すなわち唯一性(oneness)が多少強調される表現でも「天の父母様」は「天」(heaven)におられる「父母」(parent)という意味が強調される。本研究では便宜上「神様」と称する。

2. 『原理本体論』の概要

1) 本体論の重要性と概念

(1) 実体と本体の概念

統一原理では実体とは、用語を「神様」(第一原因者)ではなく、「神様の被造物」として定義している。

例えば、『原理講論』で、「神様から分立された二性の実体」(講論、p.52)、「神様から実体として分立された両性」(講論、p.53)、「神様の本性相と本形状の実体になっている被造物の全ての個性体」(講論、p.42)、「神様の創造理想は、人類始祖が御言の実体として」(講論、p.127)、「イエスが御言の実体として来られて(ヨハネ 1:14)」、(講論、p.128)、「個性真理体はこのように神様の二性性相に似て、実体として分立されたもの」(講論、p.28)、「イエスと聖霊も神様の二性性相から実体として分立された対象に立っていて」(講論、p.236)、「創造理想の完成実体として再臨される第二アダムとなったイエス」(講論、p.279)、「神様が善の目的を成すための善の実体対象として人間を創造」(講論、p.116)、「被造世界は、神様の本性相と本形状が数理的な原則によって実体的に展開されたもの」(講論、p.57)。

そして、『原理講論』は、神様から実体がどのように形成されるのかについて説明している。「万有原力によって、神様ご自体内の二性性相が相対基準を造成し、授受作用をすることになれば、その授受作用の力は繁殖作用を起こし、神様を中心として二性性相の実体対象として分立される。」(講論、p.33)

このような観点は、先生の語録集である『御言選集』でも同じだ。例えば、神様の内的な全ての存在が表現されて現れるのだが、それが実体だ(天聖経、92.1.20)、「無形の神様が実体相を持つためにアダム・エバを創造」(74.5.10)[2]、「無形の神様の愛の理想が、実体人間を通して実現」(85.8.20)

『統一思想要綱』でも実体は神様の被造物として説明される。

「統一思想の「実体」は、もちろん統一原理の「実体」の意味に由来する。統一原理には実体基台、実体献祭、実体聖殿、実体世界、実体相、実体対象、実体路程など、実体と関連した用語がしばしば使われているが、この「実体」は被造物、個体、肉身を使う人間、物質的存在などの意味を持った用語だ」(統思、p.46)。「実体対象とは、客観的、物質的側面を表現した概念であり、空間的要素を備えた物質的対象だ」(統思、p.137)。「授受作用を通して映像が物質的な体を備えて現実的な実体となる」(統思、p.141)。

「人間の性相と形状も統一思想においては各々実体の概念に含まれる。ところで原相において、陽性と陰性を各々本陽性・本陰性という。原相の本性相と本形状および本陽性と本陰性に似て現れたのが、人間の性相・形状と陽性・陰性だ。ところで、被造世界では上述したとおり、性相も形状もすべて実体の性格を持つ。したがって、陽性と陰性はすべて実体としての性相・形状(または、その合成体の個体)の属性になっている。」(統思、p.46)

このように統一原理では実体(substance)を存在(being)、あるいは被造物(created being)、すなわち神様の創造物として定義する。

統一原理では、「本体」は実体(substances)の根源、あるいは存在(beings)の根源として定義する。このよ

---

[2] 문선명선생말씀편찬위원회,『문선명선생말씀선집』 (서울: 성화사, 2007)。以下文鮮明先生がおっしゃった年代だけ表記。例えば、「99.3.6」。

うな本体を第一原因者、創造主、絶対者といい、キリスト教では神様と称する。ユダヤ教でのヤハウェ、イスラム教でのアラー、儒教での上帝、道教での太極(道)、仏教でのブラフマーなども本体に該当する。
ところで、「本体」が、「実体」と同じ意味で使われたりもする。国語辞典では実体を「常に存在し、なくならないもの。本体ともいう」と定義する。すなわち、変転するものの根底で変わることがないものを意味する。
歴史的に多くの哲学者らが、実体を本体と同じ意味で議論してきた。アリストテレスは「実体は、主語になり、述語にはならない」とし、実体は形状(eidos、実体になる本質)と質料(hyle、実体を成す素材)で構成されると主張した。デカルトは「実体とは、それ自身のために他のものが必要でないもの」とし、神は無限の実体で、精神と物質は独自的で有限な実体であるといった。ライプニッツは、モナド(単子)が実体であると主張したし、スピノザは、実体とは神様だけであるといった。観念論者らは、実体を神、イデア、その他の精神的な存在として把握した。
Marxism 以前の哲学者らは、実体とは、全ての存在するものの根源であり、常に不変で同一であるといった。これに反し、唯物論的傾向に立脚した汎神論者らは、自然を実体とみなし、弁証法的唯物論者は、実体とは不断に運動して発展する物質であると解釈した。一方、道教では「名付けて呼ぶことができる名は、真の実体の名ではない」と説明している。
しかし、本研究では、統一原理の観点にしたがい、本体を第一原因者、創造主、絶対者である神様であると規定する。

(2) 本体論の概念

本体論は、本体に関する理論であるが、『御言選集』でも本体論は神様に関する理論であると説明される。例えば、神様は、哲学における本体論の主体であり(82.10.29)、神様がいるか、いないかは哲学が扱った本体論の問題だ(82.10.30)。本体論は絶対者(エホヴァ、神様、アラー、天、真如)に関する理論だ(82.11.25)。本体論は神様に関すること、神様の本体的事実を教えるものだ(08.8.31)。本体論は神様がどのような方であるかということを教える(09.7.7)。本体論を知れば、神様がどのような方であるということを知り、神様をくまなく知るようになる(11.11.29)。
『統一思想要綱』でも、本体論は、神様、または宇宙の根源をどのように把握するかに関する理論であると説明する(統思、p.158)。特に『統一思想要綱』の原相論(原相論、Theory of the Original Image)は、本体論であるといえる。『天聖経』の第一編真の神様も本体に関する御言であり、組織神学における神論(doctrine of God)も本体論に該当する。
このように本体は、万有の第一原因者、根源者、あるいは創造主なので、被造された全ての存在には本体の性稟と創造目的および創造法則が内在している。学問は、窮極的には存在の根源を探求するので、本体論と連結されている。
本体論を学問分野に結びつければ、様々な本体論を考えることができる。まず、宗教学的本体論がある。これは、キリスト教本体論、イスラム教本体論、仏教本体論、儒教本体論、ヒンズー教本体論、道教本体論、曾山道本体論、天道教本体論、円仏教本体論など、各宗教から見る第一原因者、絶対者に関する理論だ。

二番目に、哲学的本体論がある。古代哲学本体論、近世哲学本体論、現代哲学本体論など、哲学的観点から見る第一原因者、絶対者に関する理論だ。
三番目に、自然科学的本体論がある。これは、数学的本体論、物理学的本体論、天文学的本体論、化学的本体論、生物医学的本体論、工学的本体論など、自然科学的観点から見る第一原因者、絶対者に関する理論だ。
四番目は、人文学的本体論だ。歴史学的本体論、心理学的本体論、文学的本体論、人類学的本体論など、人文学的観点から見る第一原因者、絶対者に関する理論だ。
五番目は、社会科学的本体論だ。これは政治学的本体論、経済学的本体論、法学的本体論、経営学的本体論、社会学的本体論など、社会科学的観点から見る第一原因者、絶対者に関する理論だ。
六番目は、芸術・体育的本体論だ。音楽的本体論、美術的本体論、総合芸術的本体論、体育学的本体論などの観点から見る第一原因者、絶対者に関する理論だ。

(3) 本体と本体論の重要性

本体は、万有の存在(実体)と価値と法則の根源者であられ、第一原因者だ。したがって、本体を通して、私たちは全ての存在の根源を定立することができる。本体を通して、全ての存在法則の根源を確立でき、存在に内在した法則を統一することができる。本体を通して、全ての存在が持っている存在目的の根源を定立でき、多様な存在目的を統一することができる。また、本体を通して、全ての価値観の根源を定立することができて、価値観の統一が可能になる。本体を通して、全ての存在(実体)の根源を定立することができる。
それだけではなく、本体を通して、全ての宗教の根源を定立することにより、宗教の統一をもたらすことができる。また、全ての学問の根源を定立することによって学問(例えば、人文学、社会科学、自然科学、芸術学、体育学)の統一が可能だ。本体を通して全ての体制の根源を正しく定立することにより、体制(例えば、政治、経済、社会、文化、芸術)の統一を成すことができ、無神論、不可知論、唯物論、進化論なども克服できる。
本体論が現実問題においてどれほど重要なものであるかは、『御言選集』に数多く強調されている。宗教紛争の根本原因は、本体論の曖昧性において(82.11.25)、各宗教の本体(絶対者)の実存性・属性・創造目的などが明らかになってこそ宗教の実践徳目がよく守られる(82.11.25)。本体を省けば理想論を立てることができず、本体哲学が省かれた人間論では理想的に決着をつけることができない(90.11.20)。
『統一思想要綱』でも本体論の重要性は強調されている。本体論は思想体系の基礎なので現実問題に対処する方法も本体論で糸口を見つけることができる(統思、p.158)。正しい本体論によって、人生問題、社会問題、歴史問題を正しく根本的に解決することができる(統思、p.164)。本体論により、宇宙の根源、神様の属性を理解するようになり、人間観、社会観、歴史観が変わり、それによって現実問題の解決の方法が変わる(統思、p.164)。

2) 従来の本体論

(1)　従来の本体論の限界性

古代ギリシャ哲学のタレスは水を、ピタゴラスは数を本体とみなし、アウグスティヌスとトマス・アクィナスは神を、ヘーゲルは絶対精神を、ショーペンハウアーは盲目的意志を、ニーチェは権力意志を、マルクスは弁証法的唯物を、東洋哲学は理気を本体とみなした(統思、pp.158-164)。

先生は、従来の本体論が限界性を持っていることを指摘している。従来の哲学は本体論を解決することができなかったのであるが、神は存在するのか、神は誰かなどがわからずにいる(89.6.18)。哲人は、今まで人間を中心として、すなわち、人間の五官を中心として本体論をいっている(71.2.11)。根本の本体、すなわち神様を差しおいた人間中心の思想は誤りだ(90.12.30)。

物理学は科学的な実験を通して物質の本質が何かという疑問と共に本体論を研究してきた。特に、量子物理学、分子物理学の一部の実験は、本体論的問題を探求するためになされた。生物学でも、生命の本質とは何かという本体論的問題を取り扱う。しかし、物理学と生物学は、まだ解決点を探せない本体論の問題に直面している(79.11.23)。

『統一思想要綱』でも、従来の本体論は、理性、意志、概念、物質が中心であり、神様の属性を正しく把握することができなかったし、属性相互間の関係を正しく捕捉することができなかったと指摘する(統思、p.165)。

(2)　新しい本体論の出現と使命

従来の本体論は本体を明確に明らかにするには限界があるので、新しい本体論が要求される。なぜならば、従来の本体論では多様で複雑な歴史的、世界的問題を解決できなくなっているからだ。したがって、全ての問題を根本的に解決しようとするならば、唯一で絶対的な本体に関する正確で正しい解明をする本体論が要求される。真なる本体論は、自然科学的知識と矛盾してはならず、良心の判断によっても納得されなければならない。真なる本体論によって立てられる価値観こそ、真の意味の絶対的価値観だ(82.11.25)。

新しい本体論には、解決しなければならない様々な使命がある。

まず、新しい本体論は神の実存性と唯一性を究明しなければならない。新しい本体論は、唯一・絶対の神に関する正確で正しい解明をしなければならない。そうしてこそ絶対的で普遍的であり、根源的な価値観を確立することができる。また、従来の全ての絶対者が、各々別個の神ではなく、同一の一つの神であることを明らかにしなければならない(82.11.25)。

二番目に、新しい本体論は、神の属性と創造性を究明しなければならない。

新しい本体論は、神様の属性・創造の動機・創造目的・創造の法則を明らかにすることにより、創造目的と創造の法則が宇宙万物の運動を支配していることを解明しなければならない。すなわち、宗教の本体の絶対者に関する実存性、属性、創造目的などが十分に明らかにされなければならない。それと共に、人間が守らなければならない規範が宇宙の法則、すなわち天道と一致することを解明しなければならない(82.11.25)。『統一思想要綱』の本体論の原相論では神様の属性、創造動機、創造目的、構造などを詳細に明らかにしている(統思、p.165)。

三番目に、新しい本体論は神の摂理を究明して、現実問題を解決しなければならない。

新しい本体論は、歴史の中に「逆天者は亡び、順天者は存する」という命題が適用されてきたことを証明し

なければならない(82.11.25)。『統一思想要綱』の原相論では、現実問題の根本的解決の基準を本体論的観点で確立している。

四番目に、新しい本体論は神を中心とした宗教統一をしなければならない。

新しい本体論は、神の全貌を正しく把握し、全ての宗教は神様から立てられた兄弟的宗教であることを明らかにしなければならない。すなわち、全ての宗教の教理の不備な点、未解決な点を補完し、教理の一致化を実現しなければならない(82.11.25)。神に関する全てのことを解明し、全ての宗教の神、あるいは、絶対者は、唯一の神であり、同じ神であることを明らかにしてこそ宗教間の葛藤が解決される。

3)『原理本体論』

(1) 『原理本体論』の出現背景

2008 年 8 月 31 日の訓読会の御言には、『原理本体論』の出現背景がよく説明されている。『原理解説』の次に『原理講論』が出てきて、その次には「原理原本論」、「原理本体論」だ。『原理講論』が出てきたので、その次には「原理本論」が出てくるべきで、本体論の本論を成した人が出てこなければならず、原理の主人が出てこなければならない。すなわち、実体と一体なった「原理一体論」、「神様の本体論」が出てこなければならない。「原理本体論」は、根本になる神様本体論だ(08.8.31)。

ところで、先生は、『原理本体論』の次に「原相論」が出てこなければならないと語られる。[3]「原理本体論」を超え、神様の「原相論」が出てこなければならない。本体を知っても、神様の胸中にある、育って出てくる内的な神様がわからなければならない(09.1.4)。「原理本体論」の次には「原相論」が出てこなければならない。本体の体になる前の原相であり、これは神様が内的に育って出てきたものを中心としたものだ(09.1.9)。「原理本体論」は、神様に対して説明するものだが、「原理本体論」を超えて「原相論」にならなければならない(09.1.11)。「原理本体論」の上に「原理原相論」、すなわち堕落する前の神様の「原相論」が出てくる(09.1.12)。「原理本体論」では不足であり、「原理原相論」でなければならない。『統一思想』で本体論をいうとき、「原相論」から始めているが、これは本体がある前に本然のかたちがあったからだ(08.11.15)。

このような御言は、『原理本体論』の次の段階としてより内的な、すなわち、本体が存在する前の「原相論」が必要だという点を強調する。神様は、本性相的属性と本形状的属性が統一・中和を成して絶対・唯一・不変・永遠・自存しておられるが、「本体がある前の原相論」が具体的に何かは今後研究すべき課題だ。

先生は、『原理本体論』を『原理解説』と『原理講論』に対比して説明する。『原理解説』というのは、「原理原論」ではなく、『原理講論』も教えることができる標準にはなったが、「原論」ではない(08.10.27)。統一原理は、まず原理の解説をいい(原理解説)、次は原理の講論をいい(原理講論)、今は原理の本体(原理本体論)をいっている(09.12.7)。まず、原理を解説する『原理解説』が出てきて、その次に教えることができる時代に入ってきたので『原理解説』を講論して教える『原理講論』が出てきた。今は原理の実体時代が到来したので、実体の内容を中心とした『原理本体論』が出てきた(09.1.9)。『原理解説』時代から『原理講論』時代があ

---

[3]「原理本体論」との用語が初めて出てきた(2008.8.31)の後、5 ヶ月が過ぎて 2009 年 1 月「原理本体論」の次に「原相論」が出てこなければならないという御言が『御言選集』にあるが、その以後にはこれに対する言及がない。

り、今は「本体論」時代だ(09.8.1)。『原理本体論』というのは、終末に神様が「時が来た」と言われてこそ出てくることができるのである(08.10.12)。
実際、『原理解説』以前に『原理原本』(Original Book of DP、ODP)が、1952 年 5 月 10 日、世の中に姿を現した。先生の直筆で執筆されたのである。『原理原本』というのは、「統一原理」に関する根源的経書、起源的経書であるということができる。
『原理解説』(Explanation of DP、EDP)は、5 年後の 1957 年 8 月 15 日に出版された。先生の指示で劉孝元(ユ・ヒョウォン)元韓国会長が執筆し、これは『原理原本』の土台の上に「統一原理」を解説した内容を体系化した経書だ。『原理講論』(Exposition of DP)は、さらに 9 年後の 1966 年 5 月 1 日に出版された。変化発展する時代性に合うように、統一原理の叙述方法と内容伝達をよりやさしく、理論的に体系化せよとの先生の指示で劉孝元元会長が執筆した。これは、「統一原理」をよく講義できるように体系化した経書だ。
ところで、先生は、『原理本体論』教育を強調する。救援摂理時代が過ぎ、本然の創造理想世界を準備するために『原理本体論』教育をしなければならず(09.5.4)、『原理本体論』教育が最後である(09.5.4)。今まで『原理原本』、『原理解説』、『原理講論』を教育したが、これからは『原理本体論』を教育しなければならない(08.10.11)。神様は永遠で、主体者である方であり、『原理講論』では 3 分の 1 もわからないので『原理本体論』を学ばなければならない(09.12.5)。真の父母を知ることができる原理も、『原理解説』・『原理講論』だけでは不足であり、『原理本体論』がわからなければならない(09.1.4)。『原理本体論』というのは、地上人だけでなく霊人らも教育しなければならない。これからは、霊界の家族までも地上再臨させて『原理本体論』教育を受けるようにし、一家庭で 8 代まで同苦同楽して共に暮らさなければならない天宙安息圏の時代に入った(10.7.8、10.12.4)。
『原理本体論』教育に対し先生は数えきれないほど強調してきた。

(2) 『原理本体論』の定義と主要内容

先生は、『原理本体論』が神様に関する理論であると説明する。『原理本体論』というのは、神様がどのような方かということに対する理論だ(09.1.9)。私たちは、本質論を話すので『原理本体論』をいい、哲学にも「本体論」といえば神様に対する問題が問題になる(09.5.4)。『原理解説』と『原理講論』があって三大祝福「本体論」があるのに、本体論で神様圏に入らなければならない(09.10.31)。
『原理本体論』(Original Substance of Divine Principle、OSDP)は、大きく二つの観点から定義することができる。ここで「原理」は統一原理(Unification Principle、Divine Principle)を意味し、新しい真理、新しい御言、成約の御言を意味する。本体は、根本の実体、すなわち、起源・根源(Origin)を意味する。
一番目は、従来の本体論と対比される定義だ。上記で、「本体」は、全ての実体の根本・根源(Origin of Substances、Original Substance)、あるいは、全ての存在の根本・根源(Origin of Beings、Original Being)であるとした。したがって、「本体論」は「本体に対する理論」(A Theory about the OS)となる。本体論は、見る観点により、いろいろありえる。例えば、キリスト教本体論、ユダヤ教本体論、イスラム教本体論、儒教本体論、道教本体論、仏教本体論、哲学本体論、唯物論本体論、科学本体論。
ところで、『原理本体論』というのは、上で議論した従来の本体論の限界性を克服するために出現した新しい本体論だ。すなわち、新しい真理(新しい御言、成約の御言)の統一原理的観点から見る本体論だ。した

がって、『原理本体論』というのは、既存の宗教、哲学、あるいは科学から見る本体論ではなく、「統一原理から見た本体論」(A Theory about the OS in view of Divine Principle)ということができる。
二番目は、既存の統一原理経書と対比される定義だ。上記で、『原理原本』(ODP)は統一原理の根源・起源になる経書で、『原理解説』(EDP)は統一原理を解説する経書であり、『原理講論』というのは統一原理を講義する経書であるといった。
ところで、先生は、『原理本体論』が統一原理の根源に関する理論であると説明する。『原理本体論』というのは、原理が生じる根本の根に関することだ(10.1.29)。『原理解説』というのは原理を解説する理論で、『原理講論』というのは原理を教育できる(教えることができる)理論であり、『原理本体論』というのは根本本体に対する理論だ(08.12.26)。このような御言を考慮するとき、『原理本体論』というのは、「統一原理の本体に関する理論」(A Theory about the Origin of Divine Principle)とすることができる。
それでは、『原理本体論』の主要内容は何だろうか。もちろん、『原理本体論』というのは、神様に関する内容なのであるが、先生はその主要内容に関して説明する。『原理本体論』教育は、神様の実体を教えて絶対性教育をするところにその根本的意味がある。『原理本体論』教育で最も重要なのは、神様、絶対性、真の父母を正しく知るようにすることだ(11.9.15)。
本研究では、『原理本体論』の内容をまず一般的観点で議論した後、これを本然の観点と復帰の観点で再検討する。一般的観点はどんな主題に対しても適用できる普遍的な観点だ。すなわち、背景/概念(Background、Definition)、意義/目的(Why)、主体/対象(Who)、内容(What)、方法/システム(How)、時期/段階(When)、場所/環境(Where)だ。これらは、第三祝福、すなわち、主管的四位基台の構造を成す。
背景/概念では「本体の定義」、意義/目的では「本体の実存」、主体/対象では「本体の属性」、方法/時期/場所では「本体の存在の姿/格位」、内容では「本体の創造活動、悲しみと苦痛、摂理活動」を議論する。

3.『原理本体論』の内容(I): 一般的観点

1) 『原理本体論』(1): 本体の概念

『原理本体論』に関する最初の主題は、「本体の概念」に関する統一原理的立場だ。統一原理は、窮極的に無形であれ、有形であれ、全ての存在の第一原因が存在しなければならないと説明する。存在世界に内在する各種法則と精密な複雑性と価値、そして普遍性と不変性は決して偶然に生成されることができないからだ。統一原理は、全てのものの究極的第一原因である本体を「神様」と規定する。
『御言選集』には、神様が万有の本体であることを数えきれないほど強調されている。例えば、神様は創造主・絶対者で、被造物と被造世界と宇宙の本体だ。神様は、心情と真の愛、そして真理と御言と原則の本体だ。神様は、心と良心、情・知・意、真・善・美、価値の本体だ。神様は、生命と血統の本体で、力とエネルギーと二性性相と能力の本体だ。神様は、理想と幸福と希望と栄光の本体で、因縁と能力と熱意、そして、試練と克服の本体だ。神様は、全ての存在の根本で、根と原因だ。
ところで、『御言選集』には、メシヤも本体であるという表現が見える。例えば、救世主は愛と真理と心と生命の本体だ(59.9.6)。再臨主は、人間の愛と生命と真理の本体だ(57.4.7)。イエスは、一つの中心になる

本体として来た(56.11.11)。イエスは、弟子たちの愛の本体として、全人類の前に愛と生命の本体として来た(58.10.5)。イエスは、真理の本体として来た(65.11.1、71.8.19、73.10.21、89.2.5、90.12.28、92.8.1)。真の父母様は、原理の本体だ(93.4.16)。
このような御言は何を意味するのか。メシヤは、無形の本体である神様と心情一体を成し、神人愛一体を成し、神様の子女になり、聖殿になり、形状になり、実体になるという点で有形の本体ということもできる。そのような点で、神様を無形の本体というならば、メシヤ・真の父母は有形の本体といえるはずだ。しかし、本研究での本体は、神様を指す。

2) 『原理本体論』(2): 神様の実存

統一原理は、本体が神様で、神様は必ず実存されると明らかにしている。歴史的に、神様の実存に対し多くの神学者、哲学者、科学者らが議論してきた。今まで、神様の実存に関する論証は大きく 5 つ分けてある。本体論的(あるいは存在論的)論証(ontological argument)、宇宙論的論証(cosmological argument)、目的論的論証(teleological argument)、道徳的論証(moral argument)、そして個人的体験(personal experience)だ。しかし、無神論者や不可知論者はもちろん、有神論者らまでも、これら論証に対し賛否の見解を主張してきた。
筆者は、統一原理の観点から、より包括的に神様の実存を立証しなければならないと主張する。統一原理によれば、全ての存在は神様の真の愛と御言と原力から始まった実体だ。ここでいう真の愛は、御言と原力など全ての根源・中心だ。全ての存在(実体)には、真の愛と御言と原力の要素が内在している。したがって、筆者は、全ての存在(実体)に普遍的に内在している真の愛と御言と原力[4]が、偶然に、自発的に、任意的に生成されず、必ず原因者の計画(design)によって生成されるとみなすことによって原因者(本体、設計者)の実存を立証しようと思う。全ての存在は、真の愛と御言と原力の普遍的側面(普遍相)と個別的側面(個別相)を共に持っている。
ここで御言(logos)には、内的性相(情、知、意)と内的形状(観念、概念、法則、数理性)の属性が内包されている。内的性相は合目的性(美、真、善、自由、平和、統一、幸福など)の原因になり、内的形状は法則性(二性性相、授受作用、正分合作用、四位基台、三大祝福、数理性、普遍性など)の原因になる。したがって、真の愛と御言と原力の観点から、様々に論証できる。例えば、真の愛を通した論証、合目的性を通した論証、二性性相を通した論証、授受作用を通した論証、正分合作用を通した論証、四位基台を通した論証、三大祝福を通した論証、数理性を通した論証、普遍性を通した論証、質料を通した論証などの 9 種類を考慮することができる。
筆者は、論証の対象を大きく 7 種類、すなわち宇宙、物質、生命、意識、歴史、天宙、そして真の父母に分類する。「宇宙」(G1)はエネルギーと時間および空間を、「物質」(G2)は string(ひも)、素粒子、原子、分子、物体(固体、液体、機体、プラズマ)を含む。「生命」(G3)は DNA と細胞と植物と動物を、「意識」(G4)は人文学と社会科学と芸術分野を含む。「歴史」(G5)は人類歴史と自然史を、「天宙」(G6)は霊界(霊人、天

[4] 「原力」は神様の本形状であり、『原理講論』では万有原力(universal prime force)、『原理解説』と『統一思想要綱』では原力(前エネルギー、pre-energy)と呼ぶ。本研究では便宜上「原力」という用語を使うようにする。

使、物質、時空間、エネルギー)と六界の統一的関係を含む。最後に、「真の父母」(G7)は宇宙、物質、生命、意識、歴史、天宙など 6 種類全体を内包し、真の愛と御言と原力を理想的に実体化した人格体だ。そうして、神様の実存の論証は、宇宙を通した論証、物質を通した論証、生命を通した論証、意識を通した論証、歴史を通した論証、天宙を通した論証、真の父母を通した論証など、7 つを考慮することができる。

ここで、論証の方法(9 つ)と対象(7 つ)を共に考慮すれば、神様の存在を立証する方法は無数に多くなる。実際、既存の 5 つの論証はその多くの方法中の一部分になる。筆者は、現代物理学の宇宙(G1)と素粒子(G2)を通して 9 つの観点から神様の存在を論証したことがある。[5]

3)『原理本体論』(3): 神様の属性

本体である神様は、いかなる属性を持っているだろうか。同じ神様を信じながらも、数多くの教派に分裂した理由には、神様の属性に対する観点の差を無視できない。

『統一思想要綱』も、神様の属性がどれほど重要かを強調している。「統一思想は、人類の全ての難問を根本的に解決することにより、人類を永遠に救援するために出現した思想だ。ところで、そういう難問の根本的な解決は、神様の属性に関して、正確にまた、十分に理解してこそ可能になるのである」(統思、p.29)。

実際、『統一思想要綱』の土台と基礎と出発点は「原相論」であるが、「原相」は神様の属性を意味し、原相論は神様の属性に関する理論だ(統思、p.29)。したがって、統一思想は神様の属性を土台にした理論体系ということができる。

プロテスタントでは、学者により神様の属性を様々に区分する。非道徳的属性と道徳的属性、絶対的属性と相対的属性、非共有的属性と共有的属性などだ。共有的属性は、神様の唯一性、不変性、全知性、全能性、無限性、自存性、偏在性、統一性、完全性などだ。そして、非共有的属性は、神様の愛、真理、真実、霊性、定義、神聖性、公義、公平、善、慈悲などだ。

本研究では、このような属性を「神様の属性」と「神様の存在の姿・格位」に区分して議論する。『統一思想要綱』では、「神様の属性」に関することは、「原相の内容」(第一節)で「神様の存在の姿・格位」に関することは「原相の構造」(第二節)で主に説明する。

筆者は、神様の属性を二性性相的観点から本性相的属性と本形状的属性に区分する。本性相的属性は、神様の心(天心)に該当する属性で、本形状的属性は神様の体(原力)に該当する。本性相的属性と本形状的属性の中心は、真の愛(心情)だ。

『統一思想要綱』は、本性相的属性をまた、内的性相の属性(主体的属性)と内的形状の属性(対象的属性)に区分し、内的性相の属性は情・知・意、内的形状の属性は観念・概念・法則・数理性などと規定する(統思、pp.32-34)。そして、本形状的属性は無限応形成(波動性に関連)と質料要素(粒子性に関連)で構成される(統思、p.37)。筆者は、これを本性相と対比し、外的性相の属性(無限応形成、主体的属性)と外的形状の属性

---

[5] 第 23 次国際統一思想セミナー(2011 年)で「現代物理学から見た神様の実存」を発表した.これは『清心論叢』(清心神学大学院大学校)第 9 集(2013)に掲載される予定だ。

(質料要素、対象的属性)に区分する。
したがって、神様の属性は、大きく本性相的属性(心、天心)と本形状的属性(体、原力)で構成される。これをまた、二性性相の観点から細分すれば、神様の属性は、内的性相の属性(情、知、意)と内的形状の属性(観念、概念、法則、数理性)、外的性相の属性(無限応形成)と外的形状の属性(質料的要素)の四つで構成される。
プロテスタントで規定する神様の属性の中で、神様の全知性、全能性、無限性、自存性、完全性などと同じ非共有属性と、神様の愛、真理、真実、霊性、定義、神聖性、公義、公平、善、慈悲などの共有属性は、真の愛(心情)を中心とした内的性相の属性(情、知、意)と内的形状の属性(観念、概念、法則、数理性)に関連する。

4) 『原理本体論』(4): 神様の存在の姿と格位

本体であられる神様は、どんな姿で存在し、被造物・被造世界とどんな関係を結んでいるのか。プロテスタントでは、神様が、絶対、唯一、不変、永遠、自存、無所不在のような非共有属性を持っており、被造物と被造世界を創造された創造主の格位を持っておられることを強調する。『原理本体論』は、これをもう少し体系的に、もう少し多様に説明する。
筆者は、神様の属性の特性と相互関係から「神様の存在の姿」を理解しようと思う。
最初に、神様の本性相的属性(内的性相の属性、内的形状の属性)は、神様が人格的神であり、全知全能な姿を持つ。すなわち、神様は、真の愛と心情、情・知・意を内包し、原則の中で全知全能だ。
二番目に、神様の本形状的属性(外的性相の属性、外的形状の属性)は、神様が無形で、無所不在する姿を持つ。すなわち、神様は、無限応形成と質料要素が融合した「原力」(前エネルギー、pre-energy)状態を維持するので、エネルギー・時間・空間・物質を超越した無形であり、自ら存在する自存性を持ち、宇宙に偏在される。
三番目に、神様の属性は、二性性相、授受作用、正分合作用、四位基台などの法則により相互関係を結び存在するので、神様は不変性と永遠性の姿を持ち、合わせて絶対性と相対性と中和性の姿も持つようになる。
四番目に、神様の属性は、統一と調和をなしているので、神様は統一性と調和性の姿を持つ。すなわち、本性相的属性(内的性相の属性、内的形状の属性)自体内には統一と調和が維持され、本形状的属性(外的性相の属性、外的形状の属性)自体内にも統一と調和が維持される。それだけではなく、本性相の属性と本形状の属性という二つの属性は互いに中和を成している。
五番目に、全ての存在(実体)には同じ神様の属性が普遍的に内包されており、このような普遍性は一つの神様から始まったことを示唆する。すなわち、根源(起源)は一つなので、神様は唯一性という姿を持つ。
『原理本体論』は、「神様の格位」に対しても既存の本体論とは違う説明する。もちろん、既存の本体論と同じように、神様は万有の本体(根源、第一原因者)として創造主で、万有を運営して主宰する主宰者だ。しかし、『原理本体論』は一歩進んで、神様が人間に対し真の愛を中心とした父子関係(親子関係)を結んでいるので、「真の父母」という格位を強調する。すなわち、神様は、真の父母(縦的、無形の真の父母)の立

場で、人間は真の子女の立場だ。神人父子関係(神人父子之関係)は、『原理本体論』の核心的内容だ。この点は、従来の本体論と大きく違う。創造理想、人間の責任分担、人間の堕落、メシヤ、血統復帰、霊肉重生、霊肉復活などは、神人父子関係と密接な関連を結んでいる。
神様と完成人間は、心情一体と神人愛一体を成すようになり、このような人間は神様の体・聖殿・形状としての実体となる。神様(天宙父母)が、真の父母(天地父母)と真の愛で一心・一体・一念・一和になった人格体を「天地人真の父母」と称する。すなわち、無形の神様は、天地人真の父母を通して実体を持つようになり、全て自身を表わして、顕現されるようになる。このように理想的な実体を持つことによって、昼のように明るく全て自身を現した神様を「昼の神様」と称する。天地人真の父母になってこそ、人間は初めて神様の実体となる。

5) 『原理本体論』(5): 神様の創造活動

『原理本体論』は、真の愛と御言(logos)と原力による神様の創造活動を強調する。本体である神様は、一人でおられず、真の愛と心情の属性により、喜びのための対象を創造される。神様は、絶対信仰・絶対愛・絶対服従の心で創造された。従来の本体論は、この点を重要視しないでいる。そして、神様は、御言の中に内在した明らかな目的性(内的性相、創造目的)と法則性(内的形状、創造法則)に立脚して万有を創造された。したがって、目的なしに、無計画的に、偶然に、自発的に宇宙誕生と物質形成が起きることはできない。これが『原理本体論』の立場だ。
神様は、創造以前に明らかな目的と法則が含んでいる構想と設計(design)を立てておき、これにともない霊界と六界、人間を含んだ宇宙と物質を創造された。すなわち、神様は、真の愛と御言と原力によって実体を創造されたが、原力(前エネルギー、pre-energy)は霊的エネルギーと肉的エネルギーとして実体化することによって霊的な時間・空間・物質と、肉的な時間・空間・物質で成り立った霊界と六界を各々創造された。
神様は、構想→計画(御言、設計)→実体にしたがい、まず構想された後、御言(ロゴス)を創り、実体を創造された。『統一思想要綱』は、この過程を「創造の二段階」で説明する。すなわち、第一段階は御言を形成する段階(内的な構想の段階)、第二段階は御言と原力が合わさって宇宙と物質を形成する段階(外的な実体生成の段階)だ。
構想→計画→実体を霊的・肉的観点から見れば、第一段階は、神様のみおられる状態であり、第二段階は霊界を創造されて神様と霊界が共存している状態で、第三段階は六界(宇宙)を創造されて神様と霊界と六界が共に共存する天宙の状態だ。そして、神様が創造された存在(実体)は、大きく 7 つに分類することができる。
『原理本体論』は、全ての実体が神様によって創造され、神様によって運営・調節(摂理)されていることを強調する。したがって、神様の性稟と創造理想と御旨が全ての存在(実体)に内包されている。そして、このような全ての実体は、三大祝福の構造と型に合わせて創造されて存在することになり、人間は真の父母になってこそ三大祝福を実体化することができる。
本体である神様から創造された全ての実体は、創造目的と創造法則により創造理想実現に参加するように

なる。創造理想世界とは、神様を中心とし、真の愛と御言により、三大祝福の構造と体系を備えた世界だ。その世界は、霊界と六界が統一と調和をなしている天宙大家族の「天宙平和統一国」(天一国)だ。また、その世界は、共生・共栄・共義がある世界であり、真の愛を中心とした美・真・善の絶対価値がある世界であり、真の自由・平和・統一・幸福・喜びがある世界だ。

6) 『原理本体論』(6): 神様の悲しみと苦痛

従来の本体論は、神様の悲しみと苦痛に大きく注目しない。しかし、『原理本体論』は、人間の堕落によって神様が途方もない悲しみと苦痛と不幸と孤独さを感じるようになったと説明する。すなわち、神様は、真の愛と御言の世界、美・真・善の世界、真の自由・平和・統一・幸福・喜びの世界、共生・共栄・共義の世界、三大祝福(真の人間、真の家庭、真の万物主管)の世界、天宙大家族(One Family under God)の世界、地上・天上天国の世界が実現されないことによって苦しまれる。

まず、神様は、本体と創造主と父母の役割を果たせずに主権と創造理想を喪失された。神様は、堕落人間と断絶して、堕落人間からご自身の存在を否定され、ご自身の創造と摂理を否定される痛みを抱えておられる。

二番目に、神様は歴史的な怨恨と苦痛を持っておられる。すなわち人間の堕落によって、神様は偽りの愛・偽りの生命・偽りの血統のサタンに父母の位置を奪われた。そうして、神様は、愛する息子・娘を失った衝撃と悲しみで苦痛を受けておられる。すなわち、神様は、永遠の一人息子をサタンに奪われて失い、人類歴史全体を通して苦痛に満ちた心情で堕落した子女らの悲惨な姿を見ているほかはなかった。

三番目に、神様は堕落人類と堕落世界によって軟禁の状態にいらっしゃる。すなわち、神様は、自由・平和・統一・幸福・喜びの場を失って監獄に拘束された立場にいらっしゃる。

四番目に、神様は、サタンの讒訴を受けながらも、サタンを処断したり審判したりできない。すなわち、神様は、真の愛と原理の御言により万有を創造して相対し、また、真の愛と原理の御言により主管して運営される。したがって、神様は偽りの愛と非原理的なサタンに相対にしたり、処断したり、審判したりすることができない。

このように神様が苦痛を受けている悲しみの世界は、罪悪・苦痛・葛藤・闘争・悲しみの世界であり、地上地獄・天上地獄の天宙的地獄世界であり、サタンが霊界と地上を主管するサタン主管圏の世界だ。また、その世界は、サタンを中心とした三大祝福型の世界であり、サタンを中心とした偽りの愛・偽りの生命・偽りの血統の世界だ。

7) 『原理本体論』(7): 神様の摂理

『原理本体論』は、本体である神様が堕落による不倫と偽り、葛藤と闘争の世界を清算して本然の創造理想のために人類歴史を通して中断がない復帰摂理をしてこられたことを強調する。そして、人類歴史は、創造理想の「真の父母を中心とした神様の国」を取り戻すための復帰摂理歴史であり、真の愛と御言で再創造する歴史であることを強調する。従来の本体論では、この点が見過ごされている。

復帰摂理歴史を通して、神様は監獄から解放・釈放され、奪われたご自身の主権と創造理想を取り戻すことを希望される。神様は、愛する息子・娘と創造本然の世界を回帰するために人類歴史全体にわたって、苦労と最善を尽くしておられる。
人類歴史の開始と過程と目標は、ひたすら神様の真の愛と御言を中心とした天宙平和統一国、すなわち、天一国を実体的に地上と霊界に定着して完成することである。これが、神様の摂理の総結論であり、同時に神様の実体である天地人真の父母様の生涯だ。
復帰摂理は、復帰法則にしたがう再創造摂理だ。すなわち、復帰は、予定を通した復帰、蕩減を通した復帰、堕落性と罪を清算する復帰、救世主を通した復帰、重生を通した復帰、復活を通した復帰、終末を通した復帰など、復帰法則により復帰される。

4. 『原理本体論』の内容(II): 本然の観点と復帰の観点

本然の観点と復帰の観点は、上記で考察した一般的観点を堕落以前の創造本然的な立場と堕落以後の復帰的立場で区分し、本体であられる神様を再照明する観点だ。

1) 本然の観点からみた神様

本然の観点は、堕落以前の創造本然的な観点をいう。筆者は、本然の観点を 7 つに設定する。最初の観点は、万有の本体の「神様」だ。二番目は、神様の性稟が全て実体化された「真の父母」であり、三番目は神様と真の父母を中心とした理想世界、すなわち「天一国」だ。四番目は、「真の愛」であり、五番目は真の愛を具体化する設計図の「御言」だ。六番目は、天一国の民が個人的に行かなければならない「三大祝福」であり、七番目は天一国の民が全体的に成さなければならない「天宙大家族」だ。
本然の観点から本体である神様に関して調べる。
まず、「神様」の観点から見れば、神様は本体だ。すなわち、神様は、全ての存在(有形、無形)の本体で、全ての価値、全ての法則、全ての実体の本体だ。『原理本体論』は、本体が神様であられることを明らかにする。
二番目に、「真の父母」の観点から見れば、神様は天地人真の父母を通して顕現される。すなわち、神様は、天地人真の父母の中心になり、無形である天宙父母だ。そして、神様は、天地人真の父母を通して「昼の神様」になられ、神様は人類の真の父母だ。反面、天地人真の父母様は、神様の実体(子女、体、聖殿、形状)になり、神様と一心・一体・一念・一和を成し、心情一体と神人愛一体を維持する。
三番目、「天一国」の観点から見れば、神様は天一国の根源だ。また、神様は、天一国の創造主・主宰者・最高主権者で、天一国の中心・求心点だ。反面、天一国は、神様の国で、神様の主権・民・領土・体制で構成された神様の実体対象だ。
四番目、「真の愛」の観点から見れば、神様は真の愛の本体だ。そして、神様は、真の愛のために創造と摂理をし、創造活動と摂理活動の動機は真の愛にある。また、神様は四位基台の愛の起源であるから子女・兄弟・夫婦・父母の真の愛の起源だ。反面、真の愛は、神様の最高の属性であるので、真の愛は神様の属

性の中心・土台になる。真の愛は、神様の創造と摂理のための天道となる。
五番目に、「御言」の観点から見れば、神様は御言の本体・主人だ。すなわち、神様は、真理と全ての学問の起源になる。また、神様は、御言の中心・求心点になり、真理と学問の中心・求心点になる。反面、御言は、神様の創造のための設計図・構想であり、神様の本性相によって形成される。すなわち、御言は、神様の内的性相と内的形状の結合、すなわち、内的発展的四位基台を通して形成される。
六番目に、「三大祝福」の観点から見れば、神様は三大祝福の本体・主人だ。そして、神様は、三大祝福を中心として創造と摂理をされ、三大祝福の中心・求心点だ。反面、三大祝福は、神様の国の構造と組織であり、神様の創造と摂理のための体系で、目標だ。また、三大祝福には、神様の創造目的・創造法則・創造理想が含まれており、第一原因者の中心・求心点には神様がおられる。
七番目に、「天宙大家族」の観点から見れば、神様は天宙大家族(One Family under God)の本体・主人だ。また、神様は、天宙大家族の中心・求心点であり、地上人と霊人の中心・求心点だ。反面、天宙大家族は、神様を中心とした人類大家族(地上人、霊人)であり、神様の創造活動と摂理活動の最終目標となる。

2) 復帰の観点からみた神様

「復帰の観点」は、堕落以後の復帰的な観点をいう。筆者は、復帰の観点を 7 つに設定する。最初の観点は「予定」だ。予定は、創造本然の原理であると同時に復帰原理でもある。二番目は、「堕落」の観点であるが、堕落は予定を守らないことによって発生した結果だ。三番目は、「復帰」の観点であるが、復帰は堕落を克服して本然の創造理想を回復することである。
四番目から七番目までは、復帰を具体化する観点だ。すなわち、四番目は、「メシヤ」の観点であるが、創造理想は真の父母を中心とした神様の国なので、復帰は必ず真の父母になるメシヤを中心として可能だ。五番目は、「重生」の観点であるが、堕落の起源が不倫による血統問題なので神様の真の愛を中心とした血統復帰、すなわち、重生が必ず必要だ。六番目は、「復活」の観点であるが、重生(新しい誕生)が復帰の最初の出発ならば、復活(漸進的変化)は復帰の過程だ。復活の過程なしには復帰が進まない。七番目は、「終末」の観点であるが、復活は必ず完成・完結・完了、すなわち、終結にならなければならない。
七つの復帰の観点から、本体である神様に関して調べる。
最初に、「予定」の観点から見れば、神様は予定を通して創造理想を実現される。神様は、絶対予定の 100 パーセントを主管され、相対予定の中心(95 パーセント)になる。そして、神様は予定にしたがって創造活動と摂理活動をされる。反面、予定は神様の真の愛と御言から始まり、予定は神様の国を実現して存続させる原理だ。
二番目に、「堕落」の観点から見れば、神様は人間堕落によって、ご自身の実存・属性・創造・摂理が否定されている。そして、神様は堕落のために「昼の神様」になることができず、夜の神様と昼の神様は葛藤されるようになる。しかし、神様は地上・天上地獄の堕落世界を清算されるだろう。反面、堕落は神様に途方もない悲しみと苦痛と恨(ハン)と衝撃を与えた。また、堕落は神様の創造理想を喪失させ、神様が復帰摂理をしなければならない原因になった。
三番目に、「復帰」の観点から見れば、神様は復帰と復帰摂理の本体・主人だ。そして、神様は復帰と復帰

摂理の主宰者・最高主権者で、中心・求心点だ。反面、復帰は神様を解放・釈放しなければならず、神様の創造理想を回帰(回復)しなければならない。そして、復帰摂理歴史は神様の真の愛と御言によって主に導かれる。
四番目に、「メシヤ」の観点から見れば、神様はメシヤの本体・主人だ。そして、神様はメシヤを中心として摂理活動と再創造摂理を進められる。そうして、神様は「メシヤための基台」を主導して、メシヤを送ってまた、印を押される。反面、メシヤは神様の最高理想であり、神様の真の父母理想を実現しなければならない。すなわち、メシヤは神様の子女・実体・聖殿・形状・代身者・相続者の品格と使命を持つ。
五番目に、「重生」の観点から見れば、神様は重生の本体・主人だ。そして、神様は重生と重生摂理の中心・求心点だ。反面、重生は神様の復帰摂理のための第一歩になり、神様の本性相と本形状による霊的重生と肉的重生を共に成さなければならない。
六番目に、「復活」の観点から見れば、神様は復活の本体・主人だ。そして、神様は復活を通して再創造摂理をし、復活と復活摂理の中心・求心点・主宰者だ。反面、復活は神様の国を復帰する過程(process)だ。復活の最終目標は、神様の直接主管圏に入ることである。そして、復活も神様の本性相と本形状による霊的復活と肉的復活を共に成さなければならない。
七番目、「終末」の観点から見れば、神様は終末摂理の本体・主人だ。そして、神様は終末摂理の中心・求心点だ。反面、終末は神様復帰摂理の最終目標だ。すなわち、サタン主権、サタン世界(地上・天上地獄)、サタンを中心とした三大祝福、サタンを中心とした人類歴史は必ず終末になってこそ神様の創造理想が実現され得る。

5. 『原理本体論』から見た『原理講論』と『統一思想要綱』

『原理本体論』と『原理講論』の関係はどうか。上記で調べたように、『原理本体論』は統一原理(新しい真理、新しい御言)から見た本体論であり、統一原理の根本(根)になる本体に関する理論だ。しかし、『原理講論』は、統一原理自体を講義する理論だ。統一原理には、神様(第一原因)に関する内容だけではなく、人間と万物と存在世界など多様な主題がある。神様と関係なく進行した堕落や、神様の復帰摂理に関係なくなされた人間の活動と歴史的事件が数多く言及されている。また、『原理講論』は、総序から再臨論に至るまで全ての主題を神様の観点だけで説明したものではなく、統一原理全体に対する様々な主題を講義しやすいように理論体系をそろえた経書であるといえる。
『統一思想要綱』も全ての内容を神様自体、あるいは神様の観点だけで説明したのではない。一般哲学の様々な主題が、統一原理観点から哲学的に分析されて体系化されているといえる。第二章から第十一章までは、神様の属性、創造目的、創造法則、創造過程に関する内容が、第八章は神様の摂理に関する内容が一般の哲学的観点と共に直接・間接的に議論された。そのような点において『統一思想要綱』も『原理本体論』とは違う。

6. 結論

本研究を通し、本体と本体論の概念と重要性、従来の本体論が持っている限界性と新しい本体論が出現しなければならない背景と使命について調べた。また、新しい本体論として出現した『原理本体論』の摂理的背景と定義と主要内容、そして従来の本体論と相違点に関しても考察した。

『原理本体論』は、二つの観点から定義することができる。すなわち、『原理本体論』は、従来の本体論と違い、統一原理(新しい真理、新しい御言、成約の御言)から見た本体論であり、統一原理の本体(起源、根源、根)に対する理論だ。前者は、従来の本体論と対比される概念で、後者は『原理原本』・『原理解説』・『原理講論』と対比される概念だ。しかし、前者も後者も本体に対する理論であることに間違いなく、これは『御言選集』にも繰り返し強調されている。

したがって、『原理本体論』は、『原理講論』と同じ主題を議論する内容体系ではない。なぜならば、『原理原本』(1952.5.10)は統一原理の根源・起源になる経書であり、『原理解説』(1957.8.15)は統一原理を解説するのに主眼点を置いた経書であり、『原理講論』(1966.5.1)は統一原理を講義するのに主眼点を置いた経書であるからだ。すなわち、『原理原本』・『原理解説』・『原理講論』は、本体である神様に関してだけ議論したものではなく、統一原理全体に関して扱った内容だ。

そして、本研究では本体である神様を一般的観点と本然の観点、そして復帰の観点から考察した。一般的観点からは、本体の概念、神様の実存、神様の属性、神様の存在の姿と格位、神様の創造活動、神様の悲しみと苦痛、神様の摂理などの七つの観点から考察した。

本然の観点では、本体と神様、神様と真の父母、神様と天一国、神様と真の愛、神様と御言、神様と三大祝福、神様と天宙大家族など七つの観点から考察した。そして、復帰の観点では、神様と予定、神様と堕落、神様と復帰、神様とメシヤ、神様と重生、神様と復活、神様と終末などの七つの観点で調べた。最後に、『原理本体論』と『原理講論』および『統一思想要綱』の関係性に関して簡略に議論した。

「実体的天一国の土台を作る元旦 (出発、始発、初日)」になる基元節は、万有の本体(根源、起源、根)となられる神様(天の父母様)にその基礎を置いている。基元節の動機と過程と目標は、神様にあり、実体的な神様の国を定着して完成するのも神様の御旨だ。本体である神様は、万有の根源で、中心で、基準だ。

本研究が、従来の神学的、宗教学的、哲学的、科学的本体論が持つ限界性を克服するのに寄与することを願う。また、新しい真理・新しい御言・成約の御言の統一原理が本体である神様をより明瞭に明らかにすることによって無神論と不可知論、そして唯物論と進化論を克服するのに本研究が少しでも寄与することを願う。

参考文献

김균진.『기독교신학 I,II』, 서울: 연세대학교출판부, 2009.

김진춘.『천지인참부모님의 8 대 교재교본 요결』, 청심신학대학원대학교 교재 (미출판), 2012.

문선명선생말씀편찬위원회.『문선명선생말씀선집』, 제 1 권-제 615 권, 서울: 성화사, 2012.

박하규,「하나님은 계신다: 그 증거」, 서울: 쿰란출판사, 2002.

세계기독교통일신령협회.『원리강론』, 서울: 성화사, 1994.

세계평화통일가정연합,『천성경』, 서울: 성화사, 2005.

세계평화통일가정연합.『평화신경』, 서울: 성화사, 2009.

통일사상연구원.『통일사상요강(두익사상)』, 서울: 성화사, 1994.

L. Berkhof, 「벌코프 조직신학 上」(Systematic Theology), 권수경.이상원 옮김,
서울: 크리스찬 다이제스트, 1995

W. Dembski, 「지적 설계」(Intelligent Design), 서울대학교 창조과학회 옮김, 서울: 한국 IVP, 2002.

M. Erickson, *Introducing Christian Doctrine*, Grand Rapids: Baker Book House, 1994.

S. Matczak, *God In Contemporary Thought*, New York: Learned Pub. Inc, 1977.

J. Moltman. 「오시는 하나님」(The Coming God), 김균진 옮김, 서울: 대한기독교서회, 2000.

M. Peterson, W. Hasker, B. Reichenbach, and D. Basinger, 「종교의 철학적 의미」(Reason & Religious Belief),
하종호 옮김, 서울: 이화여자대학교출판부, 2008.

P. Tillich, *Systematic Theology I*, Chicago: University of Chicago Press, 1951.